

文・編集・発行 / 斉藤新緑 Tel (0776-82-1141) Fax (0776-82-2261)


【斉藤新緑事務所】〒913-0046 福井県坂井市三国町池上103-36

【e-mail】sinryoku@aurora.ocn.ne.jp

【ホームページ】http://www.ss.apdw.jp

ほっとらいん



人に、まちに、いま、

元気の種をまこう。

VOL 81・82 合併号

着眼大局・着手小局

▼戦後、日本を占領したGHQによって「将棋は野蠻」との理由で禁止されようとしていた。

なんとか禁止されないように交渉するため、当時、関西本部長代理という肩書きしかなかった升田幸三が日本将棋連盟代表に選ばれ、GHQの元に行く。「俺が詰まれたら、将棋は消されちまう。」

司令本部に行くこと、升田は開口一番「酒を飲ませてくれ」と言う。自分は5歳のときから酒を飲んでいて、人と話すときは酒を飲まなかったことがないという理由だ。

アメリカ人たちは「わかった、日本酒はないが、ビールとウィスキーならあるが、どっちがいいか」と聞く。ビールを所望した。

これは升田の最初からの作戦だったらしい。迂闊に喋って言葉尻でもつかまれたら、まずい。ビールを飲んでいけば小便に立てるから、そのときに変な質問をかわす時間が稼げる。

ところが、いつまでたってもビールが来ないので催促をする。目の前にあるという。缶ビールなのである。こんなものがある

とは知らなかった。あけて飲んでみると、これがまずい。

「なんだコレ。マズいビールだな！」といきなり大きな声を出したので、GHQはビクビクして升田を見た。

「それならナポレオンがあるかどうかする？」

升田はまだ洋酒というものを知らず、当然ナポレオンが最高級酒であることも知らない。「ナポレオンみたいな冬が来たら負けるよな酒はいらん。」

GHQが尋問する。

「日本の将棋はチェスと違って、取った駒を自軍の兵士として使用する。これは捕虜の虐待思想につながり、国際条約に違反する。将棋は日本の捕虜虐待に通じる思想だ。」

升田が答える。「元談ではない。チェスこそ取った駒は殺したままでいる。それこそ捕虜虐待ではないか。だが日本の将棋は、捕虜を絶対に殺しはしない。再び将校となつて働いてもらうのだ。」



将校：「……しる部下となつて大いに働いた。これこそ、日本の精神である」

升田：「武道の『武』とは、矛を止めると書く。力を外へ向けるのではなく、己を磨くためにあるにすぎない。また日本人は、庶民と言えど本も読めば文字も書く。将棋を指すのも教養の一環である。」

升田：「武道の『武』とは、矛を止めると書く。力を外へ向けるのではなく、己を磨くためにあるにすぎない。また日本人は、庶民と言えど本も読めば文字も書く。将棋を指すのも教養の一環である。」

それよりもお伺いしたいことがある。だいたいあなたがたは、いちいち民主主義をふりまわすけれど、チェスのどが民主主義なんだ？

王様が危なくなると女王を盾にして逃げようとするじゃないか。古来から、日本の武將は落城にあつては女や子供を逃がし、しかるのちに潔く切腹したものだ。

民主主義、民主主義とバカの一つおぼえのように言つてく

かれこれ、この調子で5、6時間を喋りまくつたらしく、さすがに「もう帰つていい」といわれた。

升田がマッカーサー司令官（GHQ）を詰めて、将棋を守つた日のことである。

この事があつて升田の名前はアメリカ著名人に広まり、ロバート・ケネディやライシャワー氏などのパーティーに列席し、会談を交わす程になつたという。

見事な外交である。

▼戦後70年たつても、なぜ米軍はまだ日本にいるのか
一九四五年の敗戦から約六年半、日本は占領され、一九五二年四月に講和条約で、日本

は独立をはたし、「連合国の占領軍はただちに日本国より撤退する」はずが、同時に結ばれた日米安保条約のもと、在日米軍と名前を変え、そのまま日本に駐留しつづけた。



「もし安保条約が署名されたら、日本側代表団の少なくとも一人は帰国後、暗殺されることは確実だ」とアメリカ側が語つたという荒唐的な日米安保条約に加え、アメリカが日本に、「望む数の兵力を、望む場所に、望む期間だけ駐留させ、なんの制約もなく行動する権利を確保する」ための日米地位協定が結ばれた。

吉田茂ではなく升田幸三が交渉していたら……。

米軍に占領されたまま平和を語り、憲法改正、無人島を守る、と保守・愛国を絶叫する人が、日本の国土、空域支配を許し、治外法権（日本の法理が及ばない）を保障し、国民の治安を脅かし、多くの犠牲者を出している荒唐の日米地位協定の改定には口も出せない。

米国依存の右翼小児病的な「お手軽愛国主義」がはびこっている。小選挙区制の弊害か、商業支配のマスコミの翼賛化か、政治がどんどん不寛容、単純化、幼児化しているように思えてならない。

西川県政3期12年を問う

福井県は元気になったのか



11月28日定例会冒頭における、西川知事の来春の知事選挙への四選出馬表明を受け、3期12年の総括と4選出馬理由と政治姿勢について、自民党県政会を代表して、代表質問を行いました。(以下、冒頭質問原文、以降、答弁原稿抜粋)

▼知事の政治手法の代表的なものの一つが、マニフェストであり、知事は過去3度の

選挙でマニフェスト「福井元氣宣言」、「新元氣宣言」、「新々元氣宣言」を掲げて当選され、それをもって県民との約束事が承認され、支持されたとして、これらを議会の議論を経ることなく行政運営の指針としてきました。しかしながら、そのマニフェストの実践が、3期12年のトリプル元氣宣言どおり、福井県が元氣になったのか、という視点に立つと、農林水産業などの一次産業は衰退の一途にあり、短

期的、個別的なマニフェストの目標達成と中長期的な視点での総合的な福井の元氣とは必ずしも結びついていません。

(斉藤)知事は、所信表明で、この12年を振り返って自ら評価されましたが、西川県政になって、本当に福井県が元氣になったと考えるのか伺う。

(西川)「福井の元氣」の代表を挙げると、福井の子供たちの学力・体力日本一。女性や高齢者の活躍。高速交通体系も方向が出てきた。

「幸福度日本一」の総合的な評価にあるように、子供・若者・女性・高齢者、一人一人が元氣に活躍できる日本一の環境があり、これは福井県がこれから課題となつていく人口急減社会を前に、新たな国づくりをリードする先進的モデル県としてのポジションを持つており、また、可能性があると考えている。

▼大塩平八郎は、天保の大飢饉に際し、窮民を救うべく「赤子が泣くのはおれの心が泣くのだ。捨てられた子、飢えたる民、それ

を前にして見物しながら思索する余地はない」と言つて反乱を起しましたが、政治家は常に当事者意識を持たねばならず、知事も、第一次産業を支える県民の悲鳴を自らの心に受け止めて、県政に取り組むべきではないかと思

います。

(斉藤)知事の所信表明からは、この厳しさに対する認識が汲み取れません

が、知事はどのように福井県の現実を認識し、対応しようとお考えか伺う。

(西川)第一次産業・農林水産業は、いわゆるグローバル化や高齢化など、環境変化の中で経営としては厳しい実態ではあるが、地方創生に向けては、大事な資産としてこれを生かす大きなチャンス。

県は、これまでも消費者に選ばれる福井米づくりやオール



2期連続の決算委員長として

シーズンの園芸生産拡大などに当たってきている。また、人のつながりや地域の環境、伝統文化を生む場所という観点から、中山間地域農業サポート、また集落単位での効果的な木材生産を行うコミュニケーションを進め、一定の成果を上げてきた。

これから、さらに県民の生きがい、やりがい、健康長寿、観光など、幅広い観点から福井の農林水産業を「県民の生活の総合産業」と位置づけ、これを守り発展させなければならぬと考えている。

県内外を結ぶ高速交通ネットワークやアジアへの窓口化なども生かし、新しい農・林・水産業へと発展させる政策を次の4年間でぜひ実行してまいります。

▼将棋の言葉には、「着眼大

局、着手小局」というのがあります。マニフェスト行政の欠点はその大局観や長期的な戦略がないままに、目先の自分本位の目標を設定し、その目標達成をもって全体が上向きで元氣になっていくと錯覚してしまうことにあります。

例えば、先月30日の新聞では、全国体力テストで本県公立校の小学5年男女、中学2年男女がそれぞれ1位になったとの報道があり、大変よろこばしいことです。こういう成果は大々的に取り上げられます。しかしながら、一方で、全国下位の指標もあります。これは、先日の議員研修会で出た話ですが、「福井県に住みたい」という人の数は全国47位最下位、「福井県をよく知っている」人は45位、「福井県に行ってみよう」と答えた人は42位であり、マニフェストによる政治は、成果ばかりが強調され、厳しい実態から目をそらしているように見受けられます。

福井県の産業を活性化して元氣にするためには、これらの指標の方が重要ではないかと思ひます。数値目標やランキングにとられすぎることは、逆に、県政を細分化し、成果主義に陥り、自らを拘束することにもなり得ます。

人の評価を気にするあまり、目新しさや話題性を追い求める

人

ことになり、地道な日々の仕事
が評価されにくいということ
もあるでしょう。

わが会派も繰り返し申し上げ
てきましたが、県政の推進に
当たっては、マニフェストに
頼るだけではなく、50年後、
100年後、福井県はどうな
っていくのかを予測し、その
ために今、何をなすべきな
のか、バックキャストにより、
未来の布石となる有効な
施策とは何かを真剣に考え、
具体的に行動すべきです。

(斉藤)知事は、マニフェ
ストという手法についてどの
ようにお考えなのか、4期目
もマニフェストという手法
によって県政を推進してい
くつもりなのか、伺う。

(西川) 県民の皆さんに
対し具体的な約束をし、その
実現を図ることは、政治の基
本である。

今後も引き続き、県内各界
各層の御意見を幅広くお聞
きし、また、それぞれの意見
の総合化を図りながら、政策
公約においてビジョンと主
要なプロジェクトを示して
まいりたい。

▼次に、多選について伺
います。地方自治は大統領制
と言われており、中国の諺に
幾ら権力を誇った者でも10



年続いた例はないという意味の
「権不十年久(けんはくじゅうねん
ひさしからず)」という言葉
があるように、一般的に、強い
権限を持つ首長が長く行政を担
うことによる弊害が言われま
す。その一つとして、人事の停
滞、職員のモチベーションの低
下、トップダウンに慣れた職員
のアイデア・発想の枯渇も懸念
されます。

(斉藤)知事は、一般的に言わ
れる長期政権の弊害について、
どのように対処するつもりなの
か伺う。

(西川) 県民の信頼をいかに
得て県政を推進し得るかとい
うことが、この問題の根本。一
期を新たな気持ちで常に全力
を傾注し、4年ごとに県民の御

評価をいただけてきている。
4期というのは長期ではな
く、政治的にはむしろ大事な時
期。この積み重ねが、旧態に陥
ることなく、初心を忘れず、県
民の皆さんの声に真摯に耳を傾
け、県民本位の県政運営に全力
を尽くすべき局面と考えてい
る。

▼総合行政について

今日、アメリカ発のグローバ
リズムが席卷する世界経済は、
中国はじめアジアの成長鈍化に
より停滞しています。我が国も、
足踏みしている状態です。人口
減少、とりわけ生産年齢人口の
減少は、日本経済に今後深刻な
影響を及ぼすと見られていま
す。

本県のような小さな県が、

限られた予算の中で、これか
らの難局を乗り切っていくに
は、総合力を発揮していか
なければなりません。

県民や事業者は、様々な事
柄が関連する社会の中で生き
ています。しかし、現状は行
政の都合によって設けられた
縦割りの壁があります。

県庁では、知事は総合政策
部をつくり、観光営業部もつ
くりましたが、そういう名前
の部があるだけであり、結
局、総合行政、政策の総合化
は実現していないと思いま
す。

そこにマニフェストという
数字を求めるシステムも加わっ
て、福井県の行政が硬直化する
のではないのでしょうか。

(斉藤)福井県をリードする県
庁として最大の力を発揮するた
めに、いかにタテ割りを廃し、
総合行政を実現するかというこ
とが、知事の最大の課題の一つ
であると思うが、所見を伺う。

(西川) 行政の縦割りは、以前
に比べて少なくなってきた
り。人口減少問題などさらに複
雑化する行政課題について、従
来どおりであれば、さらに横断
的な対応がより課題になると考
えている。

このため、福井の「ふるさと
力」の結集に向けて、県として
総合力が発揮できるよう、リー

ダーシップをと
りながら、各部署
が協力し全体性
を持って仕事を
行っていく。

国が、地方創生
を第一政策に掲げ
る中、若い世代の
希望に込める結婚
や子育て環境の充

また、4年後の国体、6年後
の東京オリンピックを控えて
おり、選手の競技力向上だけ
なく、福井の産業や観光、県民
の長期的な健康づくりなど、県
民の各界の力を結集して引き
上げる貴重なチャンスであり、
全庁的な体制の横断性はもと
より、県以外のさまざまな皆さ
んと総合的な仕事ぶりを展開
していきたい。

また、4年後の国体、6年後
の東京オリンピックを控えて
おり、選手の競技力向上だけ
なく、福井の産業や観光、県民
の長期的な健康づくりなど、県
民の各界の力を結集して引き
上げる貴重なチャンスであり、
全庁的な体制の横断性はもと
より、県以外のさまざまな皆さ
んと総合的な仕事ぶりを展開
していきたい。

▼地方創生について

国においては先日「まち・ひ
と・しごと創生法」が成立した
ところですが、この法律的目的
は、「少子高齢化の進展に的確
に対応し、人口の減少に歯止め
をかけ、それぞれの地域で住み
やすい環境を確保することであ
り、その目的の達成のために「ま

ち・ひと・しごと創生に関する施
策を総合的かつ計画的に実施す
ることとされています。



全国都道府県議会議員研修会
パネリストとして

る利潤をその地域内でしつ
かりと循環させることによ
り、力強い完結型の里山経
済を確立すべきです。
まさに地方創生のカギは
ここにあると思います。金
融工学や投機ビジネスが幅
を利かせる都会では、豊か
な人や地域は生まれませ
ん。

この「総合的かつ計画的」とい
うことについては、実はこれまで
も議会において、わが会派をはじ
めとする何人も議員が幾度とな
く提言してきたことです。

福井県には、幸いにして様々な
資源があります。豊かな自然、健
康長寿な高齢者や学力・体力の高
い子どもたち、そして家族が支え
合う日本一の住みやすさ、さら
に伝統産業や先端技術などの「も
のづくりの力」もあります。

そして、国は地方に依存しな
ければ生きていけません。地方の
農山漁村は地域自給的な底力を
持っています。人と人との関係
は、人と自然の営みの中でつく
れるものです。

農山漁村には、人をつくり、子
を育て、当たり前の人間性を育む
土壌があります。農林水産業が営
まれ、自然エネルギーにも満ちて
います。

こうした豊かな里山・里海に眠
る資源を最大限に活用し、得られ

(斉藤)知事は、福井の豊かな
地域資源をいかに組み合わせ、
どのように活用して福井県の将
来を創生していくかとしてい
るのでしようか。知事にとって「地
方創生」とは、「福井の創生」と
は何なのか、伺います。

また、創生法では、努力義務と
して、都道府県版の総合戦略の
策定が期待されています。

今述べたような観点から、人
口減少に歯止めをかけ、希望の
持てる福井県を創生するために、
県政の長期的な総合戦略を策定
すべきと考えますが、知事の所
見を伺います。

(西川) 現在、国の戦略の骨
子を見ると、国自らの政策が
必ずしも示されていない。

頑張る地方に交付金を準備し、
その応援だけでは、総人口1億
人の維持は困難。

福井版の人口減少対策の戦略
は、こうした国の政策に対し提
案もしながら取りまとめたい。

孫への手紙 (2)

ジャイアンとスネオ君

▼あけましておめでとう。もうすぐ生後6ヶ月になりますね。たつぷりのお母さんの母乳が良いのか、生後3カ月で体重が8kg、今はもう10kgあるのか、爺が抱っこしても重たいので、寝かせると、一人でコロロンと寝返りしたり、ガラガラ笑ったりするの、驚いています。

昔は、「数え年」といつて、生まれた時点の年齢を1歳とし、以後、元日が来るごとに1歳を加算していましたが、

風咲は満年齢ではまだ6ヶ月ですが、数え年では2歳になります。

生まれた時点で一歳とするのは、そもそも始まりに「0」はなく、「1」から数えるからですが、母親の胎内にいる期間(十月十日)を1年として数えているからだともいわれています。

また、何月生まれの人でも元日で一斉に歳を加えるのは、日本中の人が一斉に正月に誕生会をやっているようなものだから、日本民族が共通です。

▼風咲が生まれた時、爺がどんなに思いだったのか、書き残しておきたいと思つて手紙を書きました。

戦後から今日の取り巻く状況を思いのまま一気に書いてしまったら、随分長くなってしまいました。

読み返してみたら、随分と荒っぽく、抜けている大事な部分や丁寧な説明が必要な部分がある。



さて、年が明けて、数え年2歳になった風咲が両手を広げて大の字になって安心しきつて眠っているのを見ると、爺はホッとする一方で、心にさざ波が起きてきて、ただならぬ思いにかられます。

お前たちの将来、日本民族の未来はどうなるのか、真剣に考えれば考えるほど、たまたらず天を仰ぐことがあります。

さて、前回、アメリカの要求に従順に従い、アメリカの国益のために、日本が泣き寝入りするような経過を見ました。

その根本は、日本が起こした戦争に原因があり、日米安保条約、日米地位協定の問題があります。でも、その問題を書くとき、また、長くなるので、次の機会に書きます。

▼爺は、終戦後に生まれ、戦争を知りません。爺のお父さん(風咲の曾じいちゃん)は、戦争に行きました。(召集令状(赤紙)で戦争に動員されました)

あまり戦争の話は聞きませんでした。爺が子供の時、聞いて記憶に残っているのは、「戦場では、人の先になって突っ込むとやられてしまう。後ろから弾に当たらないようについていかなあかん」という話で、思えば、曾じいちゃんも、いわば戦争では何の役にも立たない、へつぱり腰の兵隊さんだったという事です。

もちろん、幸運に恵まれ、派遣された場所が良かったから五体満足で帰ってこれたのですが、そのおかげで、爺ちゃんはこの世に生まれ、風咲のお母さんが生まれ、そして風咲が生まれました。

仏様のお部屋に、曾じいちゃんの写真がありますから、お礼を言ってお参りしてください。「へつぱり腰の曾じいちゃん」と笑ってはいけません。戦場では「へつぱり腰」

でも、家では、酒は飲んでも道楽はせず、お茶工場を建て、しっかり働き、爺ちゃんたちを育ててくれました。この日があるのは、曾おじいちゃんが帰ってきてくれたおかげなのですから。

▼ジャイアンとスネオ君 日本とアメリカの関係は、日本人気マンガ「ドラえもん」に出てくる「ジャイアンとスネオ君」の関係にたとえられま

す。大柄で喧嘩も強く、典型的なガキ大将のジャイアンにインテリ少年のようなスネオ君はべったりくっついていきます。スネオ君はジャイアンの言いなりといった感じ



貸すようなシーンもたびたび見られます。いじめっ子のそばにいれば、自分はいじめられない。いじめる側にいれば、自分は安心。そんな計算が働いているのかもしれない。ジャイアンの不条理な要求、横暴な態度、暴力の前で奴隷のようにひれ伏すスネオ君が、日本にたとえられます。

独善的で横暴な態度や、傍若無人で乱暴な行為、暴力に対しては毅然と立ち向かう。是非々々で論じ合う、悪いことを悪いといえる、いやなことはいやだとはっきりい合える。

スネオ君には、そんな勇氣をもつてほしいと思います。はるか昔に、自分から売った喧嘩で負けたからといって、勝つたやつとつとつと自分のまま、というのとは主権国家として、経済大国として、民主国家として、はたしてどうでしょうか。

さて、日本は今、かつての戦争への道へ歩んで行った戦争前夜の背景とその「空気」によく似ているといわれています。

それは、不況のさなかの市場開放(規制緩和・市場原理主義、TPP)、金融自由化、軍需産業による戦争経済、言論統制といったものです。

戦後の「平和と繁栄」など長い歴史から見れば、ホンの一コマに過ぎません。

仮に何百年後の世界戦略を持つ人がいたらどうでしょうか。あとで、日米の博打の違「丁半バクチとポーカー」を書きますが、爺には、今や日本の政策はアメリカの要望にもとづくアメリカの国益のためであるように見えてなりません。

すべてを金勘定にして金儲けのために、あくなき欲望を充たすために、世界中の自然を破壊し、資源を食いつぐせば次の時代の人は生きられません。

▼今から40年前(1975年、昭和50年)、ある新聞記者が東京の女子大生と世間話をした時の話です。日露戦争の乃木大将や総理大臣・東条英機、連合艦隊司令長官・山本五十六に話が及んだの

ですが、その名前を全く知らない。そしてついに、彼女が尋ねたそうです。

「太平洋戦争って何？」
「日本は戦争したんだよ」
「どこ？」
「アメリカと」
「どっちが勝ったの？」

この記者が受けた衝撃は大きかった。しかも彼女によれば、「聞いてみたら、友達の話とんどは知らなかった」という。

それからさらに40年を経て、今年には戦後70年になる。何も知らない子が大量に増えているのかもしれない。私にも同様の経験がある。

「靖国神社にお参りするとなぜ韓国や中国の人が怒るのか？」
「中国の神社に日本人がお参りするから」

▼歴史に学ぶ
「知らない」ではすまされない。「知らない」ことで罪を犯すこともあります。

今日に至るまでの経過を知り、過去の経験に学ぶことで、同じ失敗を繰り返さないようにして、賢明な正しい道を選択していくことが大事です。
歴史をさぐると言っても、学校で習う歴史や一般常識で耳に



する歴史は、単なる「ひとつの説」、また「ひとつの見方」に過ぎません。歴史上の出来事にはいろいろな見方があります。

例をあげると、「明治維新」一般には、幕末の侍が、倒幕側と幕府側の敵味方に分かれて戦い、最終的には手を結び、近代化した今の日本の礎を作ったという美談。壮大なドラマになっています。

しかし、よく調べてみると、維新の背後には大勢の外国人や外国製武器の存在があります。

「明治維新」は、日本人だけで成し遂げたことでは、なかったのです！
どうやら、私たちには、自国の偉人を美化したい気持ちのあまり、自分自身のことや冷静に見えてないところが、あるようです。

この時代を舞台にしたドラマが流行り、そのストーリーが真実であるときれがちですが、事実を大局的にとらえるには、あまりにも視野が狭いと感じます。

「お金の問題」という視点から見るとどうでしょう。
お金は世界のすべてに関わっ

ています。

また戦争にもお金が深く関係しています。戦争は一見すると、「政治・民族・宗教・国家間の問題」にみえますが、戦争を始めるには、大量の武器と兵隊を用意しなければなりませんから、大量のお金が必要です。

逆にお金がなければ、戦争をしなくても、戦争そのものが起こせません。

また一見無関係の環境問題でさえ、二酸化炭素排出権というお金の取引の問題です。
そこでお金の流れから世界を探ってみます。すると複雑にみえる世界の諸問題の原因が、不思議なくらい簡単に浮かび上がってくるのです。

▼明治維新をどう見るか
徳川時代は武士の時代で、末期に、ペリーの黒船が開国を求めてきました。

「勤皇の志士」たちの「錦の御旗」となったスローガンは、「尊皇攘夷」で、外国人を追い払うというものでした。
しかし、結果は、薩長連合による討幕運動であり、「攘夷」では

なく「開国」となりまし

た。
武士が戦い、「藩」が勝利したのに、「武士」も「藩」も廃止となり、武士の怒り、反乱を弾圧して、明治の新体制が確立されました。

「下級武士であった若者たちの理想に燃えた革命によって、近代日本が動き出し、初代総理大臣が長州藩、伊藤博文となりました。

戦争は軍備が必要で、お金がなければできません。名もなく、お金もない下級武士や藩にあるはずがありません。

イギリス
が、留学させた「長州ファイブ」をはじめ、長崎グラバー邸などで志士たちの熱

気をあおり、武器を与え、日本における戦争で儲ける。明治新政府を操り、邪魔者は消し、開国した日本の権益を確保する。

こんなふうに見ると、歴史的な評価も根本的に変わって見えます。

れるというものです。
今に残る勝者による正史の陰に、失われた膨大な敗者による歴史書があるはずですよ。

「明治に元勳と言われて生き残った者たちはカスばかりだ。本当に優秀な人間たちは殺されて死んだんだ」は、旧・薩摩藩士、樺山資紀伯爵の言葉。(戦後、吉田茂首相の片腕となった白洲次郎の奥さんの白洲正子さんの祖父)

横井小楠(暗殺)、大村益次郎(暗殺)、広沢真臣(暗殺)、江藤新平(処刑)、前原一誠(処刑)、西郷隆盛(自刃)、大久保利道(暗殺)



「維新の十傑」のうち、岩倉具視以外の9人が明治10年くらいまでに暗殺、処刑、自刃、病死に至っています。

勝者側に属していても、果実を得るのはほんの一握り。一将功成りて万骨枯る。

▼長州藩の人脈
現在の安倍総理が山口県(長州)出身だからというわけではありませんが、明治維新後、政治、経済、戦争、戦後の表舞台で活躍した指導者に、多くの長州出身者がいます。

祖父は、元岸信介首相であり、東京裁判で「A級戦犯」として裁かれた人ですが、戦前戦後を貫いています。

「戦後」というと、「戦前」と切り離して考えることが多いのですが、明治維新からの流れが脈々と続いていると見る視点も必要です。

▼戦後レジーム(体制)の見直しと憲法
「敗戦後」も、天皇とそのグループ、「天皇の官僚」は、国体(国民体育大会のことではない)として護持されましたが、戦前との違いは、その体制の上にアメリカが君臨し、日本国憲法の上に、日米安保条約があり、日米地位協定があるということです。

「アメリカがつくった憲法を改正する」という声がありますが、屈辱的な日米安保条約や日米地位協定の改正の声はありません。

アメリカがつくったものなら、なおのこと死守するのが戦後の日本です。

爺には、「アメリカが作った憲法」だから、アメリカ側から「改正」を求めるわけにはいかないの、日本国内の世論(対中戦争など危機意識)を高め、憲法9条を改正させ、自衛隊をアメリカの軍隊の一部

として、アメリカの戦争に利用しようとするアメリカの要求だと見れます。
現に、これまで、アメリカからの自衛隊海外派遣要請に対して、歴代首相は「アメリカがつくった憲法に違反する」といって、憲法を盾に拒むことが出来たからです。

▼歴史観
太平洋戦争をどのように見るのか、これが「歴史観」とよ

くいわれます。
各々がどのような歴史認識を主体的に持とうが自由ですが、まずは、歴史をよく学ぶことが大切です。

「侵略戦争ではない」、「アジア解放の為」、「自存自衛の為」の戦争で、日本は悪くない(正当な戦争)という

のは、戦争の大義名分でもあったわけですが、これは、日本の戦争肯定論であり、この論調で行けば、敗戦後、受け入れたサンフランシスコ講和条約を否定し、東京裁判を否定し、ポツダム宣言受諾を否定することになりますから、第二次世界大戦後の世界体制の枠組みを否定することになります。

アメリカの歴史観とも決定的に衝突しますから、もう一回アメリカや世界を相手に戦争して

勝たねば通用するものではない
また、自分の国内では何を発
言しようが、どう評価しよう
が、ある面、構わないのですが、
相手のある話では、相手がそう
受け止めてくれているかどうか
が問題です。

頼みもしないのに、一方的
に他国の軍隊が何百万人も
入ってきて服従を求め、いう
ことを聞かなければ殺すとい
う行為は、一般的に「侵略」と
いわれます。

その戦争犠牲者がアジア全
体で1000万人を超える
(2000万人ともいわれる)
凄惨なものであったことを踏
まえ、天皇陛下をはじめ、「謝
罪」し、政府は「賠償」してき
ました。

あえて、それを今さら否定し
てみたり、「戦争の正当性」を主
張してみせることは、アジア諸
国との関係においては、怒りの
火に油を注ぐようなものになる
ことは、明らかです。

戦後70年を経過した今日、
繕ってきた傷口をかきむしって
広げているよう
に思います。

これは、戦後、
日本人の手で戦
争を起こした原
因、戦争責任を
問わず、何とな
く戦争に突入り、



原爆を落とされて、「敗戦」を「終
戦」として迎え、戦争責任は国
民全員だと一億総懺悔にして、
うやむやにしてしまったこと、
戦争指導者が、平然と戦後日本
の政界、財界の表舞台での指揮
者に復活したことに原因があ
ると思えますが、意図的に「永
遠に解決させないもの」、「仮想
敵国」として、軍備増強の口実
を作っていると考えてみる必要
もあります。

明治といえ、靖国神社につ
いて触れなければなりません。
大村益次郎の発案のもと明治
天皇の命により、戊辰戦争の戦
死者を祀るために1869年
(明治2年)に創建されました。
後に、1853年、ペリー来
航以降の、国内の戦乱に殉じた
人達を合わせ祀るようになり、
西南戦争後は、日本国を守護す
るために亡くなった戦没者を慰
霊追悼・顕彰するための、施設
及びシンボルとなっています。
(西郷隆盛や坂本竜馬はいな
い)

▼靖国問題

見の一方、政教分離や、第二次
世界大戦前の日本について侵
略だったか自衛だったかと
いった歴史認識、日本の支配
及び日本軍が送られ犠牲者も
出た近隣諸国
への配慮から
も政治家、行政
官の参拝を問
題視する意見
があります。

「靖国神社の
参拝」に、中国
や韓国が反発
して問題とな
るのは、東京裁
判で戦争犯罪人として裁かれ
た人をあとから宮司が追加し
て、合わせて祀った(A級戦犯
合祀)に原因があります。

「国に殉じ
た先人に、国
民の代表者
が感謝し、平
和を誓うの
は当然のこ
と」という意

「ドイツの首相がヒトラーの墓
参りをする」と同様に見られ
るといふことです。

一番大事なことは、「天皇陛下
万歳」と叫んで「お
国のために」命を差
し出した人の神社と
の関係でいえば、首
相ではなく、天皇陛
下ですが、A級戦犯
合祀以来、天皇陛下
は靖国神社を参拝し
ておられません。
また、日本国内の
遺族においても、召
集合状(赤紙)一枚
で戦争に駆り出された戦没者に
とっては、あの無謀な戦争を命
合した人が許せないと思ってい
る人もいて、A級戦犯を分祀し
て、天皇陛下をはじめ、誰もが
参拝できる国の神社にしてほし
いという要望が出されていま
す。



靖国神社側は、分祀には応じ
ません。
ちなみに、「太平洋戦争で戦没
した日本軍の軍人の総数は約2
30万人。その過半数は「戦死」
ではなく食糧が補給されな
ために起きた「餓死(うえじ)」、
野垂れ死にであった」という告
発本を(中隊長として中国大陸
を転戦した藤原彰という人が、
「飢死した英霊たち」という本を
書いています。

「靖国神社側は、分祀には応じ
ません。」

ちようはんばくち 丁半博打とポーカー

国民性は、その国で最も
ポピュラーで伝統的な博打
(ゲーム)を見れば、一目瞭然に
判ると言います。
日本の伝統的バクチは丁半サ
イコロ博打、アメリカ人はポー
ーカーゲーム。
丁半サイコロ博打は、「出た
目勝負」、考える必要はなく、勘
と思い切りだけで、「運」さえよ
ければ、誰にでも平等に勝つ
チャンスがあります。
一方、ポーカーは配られた5
枚のカードで競うものです。勝
てるに決まっているカードで勝
つのは子供でもできますが、
「勝てる手」などめったにある
ものではなく、極端にいえば
「ワン・ペア」もできないバラバ
ラな手でも、さますごい手の内
だと相手に思わせることで、打
ち負かせることができます。
だから、ブラフ(ウソ・ハッ
タリ・脅し)のできない人は、
ポーカーには勝てません。

ポーカーはだいたい五、
六人で始まるのが通常で
だが、一人、二人と破産
し、テーブルから抜けてゆ
く。結局は勝ち残った二人
の「サシ」となります。
それまでのゲームの進行

は、結局は「分断」作戦なのです。
柔道でも剣道でも、相手が自分
より強い弱いかは、立ち会っ
た瞬間にわかるものです。ただ、
それがわかるのは強い人間だけ
で、弱いとわからない。
この場合で言えば、参加五人
のうち上位二人はわかる。三時
間ほどの勝負のやり取りで、互
角以上の相手は、あいつ一人だ
と。

そこで内心のターゲットはお
互いに「そいつ」だけになる。
あとは、どのようにして残り
の三人を搾り取るだけ搾り取り、
速やかに駆除するかだ。それに
は弱いもの同士を争わせるのが
常道です。
自分が勝っている場合でもわ
ざと降り、その三人で勝負させ
る。自分は傍観者の立場を取り、
高みの見物、まず弱い相手に勝
たせる。時間はたっぷりある。ど
んどん勝たせていい気持ちにさ
せる。

テーブルの三人が、この「陰
謀・戦略」に踊らされ、お互い
に勝負をしい、共倒れにな
る。
一晩明け、翌日最後の二人が
顔を洗いなおし、新鮮な気分
再びテーブルに着くという段
取りです。さあ、貴様か俺かだ。
「目的はただ金のみ。金、金、
金」。
ブラフには二通りあります。
脅して降ろすだけがブラフで
はない。矛盾する言い方だが、
相手を降ろさせないブラフも
あります。
相手が可能な限りいい手を
持つていても、自分の手には絶
対かなわないと判断できると
きです。
「見下ろし」で勝っている時、
相手に降りられては何にもな
らない。儲けが少ないのです。
相手は当然こちらの癖とか、
好みとか、心理作戦とか、とに
かく人間性のすべてを読み
取っていると自負している。
また事実、そうでなければ、こ
こまで勝ち残れない。
その相手の自分への「洞察」
を逆手に取らなければならぬ。
それまでは、どこかで相手
が「おのれ」の判断が正しい
という「証拠」を見せてお



「おのれ」の判断が正しい
という「証拠」を見せてお

く。

「彼が、こう言うとき、あんな仕事をするとき、こんな笑い方をするとき、手の内は〇〇なのだ」という、「みすかしてゐる」と信じ込ませる。



をとげ、経済大国となりました。しかし、これが、「豚は太らせて食べる」という戦略であったとしたら……、これこそポーカーゲーム。

ハリウッドの企業など、どんどん日本の傘下に明け渡した。自分たちの危機感まで宣伝し、ジャパン・パッシングまで演出し、負け犬の演技をした。

「いまは、エスタブリッシュと呼ばれる一部のグローバル・エリート人間が、神に代わり、何でもできる。

「破局の小出し」を楽しんでいるのが彼らである。小は電磁波を使って日本人の脳を狂わせたり、ガンを増殖させたりすることから、大は富士山を噴火させたり、日銀を破産させたりすることなどは、その

「感情をすべて消し去れ」「目的はただ金のみ。金、金、金！」
『洗脳されるな、洗脳せよ』
(ポーカーの教則本)

上手な演技による「下手な演技」を見せ、下手な演技を見破らせるように上手に演技する。

ジャンケンで言えば、相手がグーを出すからパーを出すーと

……と思っているからパーを出すーと……と思っているに違いないから……チョキを出す。

裏の裏の裏の裏の裏の裏の裏……の裏……の裏をかく。

『ポーカーは面白いが、楽しかったり人と打ち解けたりする

ゲームではない。残酷で原始的なゲームであり、二枚舌的で詐欺的なものだ。気の弱い人、優しい人には向いていない。強欲さ、略奪精神、冷酷さを持って

相手の喉を切り裂く狡猾さ、手際よさが必要である。何よ

りも理性最優先でなくてはならず、それを使って相手(参加者全員)の金をかき集めることに集中せねばならない。

いい気分を味わい、その後じわじわと負け始め、懐の「戦利品」がどんどん減っていくと、理性を失う。

一度勝てたのだから、勝てないわけはない。必ず取り戻せるし、前任者が儲けた金を自分が赤字にするわけにはいかない。

エリート人間が、神に代わり、何でもできる。できないことは何もない。

彼らの資金は潤沢・膨大にある。見返りはそれ以上に膨大なのだから彼らの出資を躊躇させるものは何もない。

それは生産者側に奴隷的使用人を使うということではない。消費者も奴隷化するシステムである。さらに、究極の奴隷化とは、頭脳の奴隷化、マインドコントロールである。

と、ひとたびポーカーの相手になれば、その掛け金が小銭だろうと、ピーナツだろうと、小遣い程度であろうと、あらゆる狡猾さを発揮し、合法的に奪い取らねばならず、ゲーム中に味方など1人もいない

という精神状態になる。もし一時的にも勝っていないかたなら、賭け金がなくなつた時点で、あきらめよく「さようなら」となるが、プラスがマイナスになったときは、それを取り戻そうとさらに資本を投下する。払わないで済んだ財布を開き、ますます傷を深める。

あの会社は同じ日系でありながら、ウチより業績がいい、とか。あちらは撤退するらしいが、ウチは大丈夫だろうかと、そんな連絡が日本の本社から届き、視察や調査が入るだけでも、ゲームしている現場は浮き足立つ。

海底地震や巨大津波を起こすことも、異常気象と異常潮流を起すことも、エイズを蔓延させることも、やろうと思えば地球を操作することさえできる。

「まさか、ウソでしょう。そんな悪魔のような人間がいるはずがない」と思うのが普通の常識ですが、ポーカーゲームとして見たらどうでしょう？何でもありに思えます。

「民主主義とか自由などという大義名分は付着させるにしても、目的は明々白々、ただの「金儲け」に過ぎなかった」
そして金儲けの最終段階は、いまでも昔も奴隷制度の貫徹である。

『ブラフ(ハッター)』のできない人はポーカーの神から見放される

これこそ、バブルがはじけかけたときに、日本が世界中でした愚行の正体だという。

自国アメリカならアメリカにある現場の分断・マインドコントロールはたやすいものだ。たとえば、ソニーと松下、大成建設と熊谷組、第一勧業と東京銀行など同業種間。

世界中の人間に不安と恐怖を浸透させるための先端技術はすでに完璧に整っている。

最終的な「とどめの一撃」は、いつでも実行可能な状態にある。それぞれの技術やノウハウを最適なタイミングを見計らい稼働させればいい。

「今年は、西暦2015年、神武天皇即位紀元である皇紀2675年(西暦紀元前660年)であり、敗戦後70年目、ヒツジの年です。

ムこそ「戦争戦略」であり、「資本主義」そのものだといわれま

アメリカはまず日本に儲けさせ、ニューヨークの不動産、

それを拡大すれば、日本と中国、あるいは日本と韓国、ある

いまではネズミをなぶり殺しすることに無上の喜びを味わう猫のように、ごろごろと喉を鳴らしなが

「私たちは、誰に連れられてどこへ向かうとしているのか、考えられない家畜ではありません。が、最近、だんだん考えない世の中になってきたようです。



愛する人に

井上 靖

新緑の気ままにト〜ク

洪水のように、
大きく、烈しく、
生きなくてもいい。
清水のように、あの岩陰の、
人目につかぬ滴りのように、
清らかに、ひそやかに、自ら耀いて、
生きて貰いたい。
さくらの花のように、
万葉を飾らなくてもいい。
梅のように、
あの白い五枚の花弁のように、
香ぐわしく、きびしく、
まなこ見張り、
寒夜、なおひらくがいい。
壮大な天の曲、神の声は、
よし聞けなくとも、
風の音に、
あの木々をゆるがせ、
野をわたり、
村を二つに割るものの音に、
耳を傾けよ。
愛する人よ、
夢みなくてもいい。
去年のように、
また来年そうであるように、
この新しき春の陽の中に、
醒めてあれ。
白き石のおもてのように醒めてあれ。

池上村から出た五右エ門さんが店を開いたので池上屋五右エ門、なので「池五」。

その「池五」商店が、なんと創立二百周年を迎えたということで、有縁の人としてお招きをいただいたことがある。
「二百年前」というと、大塩平八郎の乱があった時だ」という社長のお話に、思わず心が熱くなったのを思い出す。

大塩平八郎はなぜ乱を起したのか。

大塩平八郎は天保の大飢饉に際し、飢餓に苦しむ庶民の救済を奉行や豪商に訴えるも聞き入れられず、見るに忍びず、窮民を救うべく門下生たちと蜂起を決意する。が、門弟の一人が反対する。反乱しても弾圧されて失敗する、無駄ではないかという。それに対し大塩はこう答えた。

「数日前、淀川を歩いていたら捨て子に会った。その泣く声が実に俺の耳の底に響く。母親なるものが



捨てた子を見返りながら立ち去りかけたが、また帰ってきて頬ずりをする。……ついに意を決して捨てていったが、その母親さえも飢えて死にそうなたった。

お前は赤ん坊の泣き声とお前の心に紙一枚を隔てている。お前は赤ん坊を見物しているのだ。ただ可哀相だと言いながら……。俺は違う。赤子の泣くのは俺の心が泣くのだ。捨てられた子、飢えたる民、それの前にして見物しながら思案する余地はない。」

「赤子が泣くのは俺の心が泣くのだ！」
孫娘の泣き声を聞くと、思わず、爺は大塩平八郎に変身してしまう。



く前に立ち寄ってみると、野良猫がまさに池の中の石を踏み台に小屋に飛び込んだ瞬間で、血相を変えて追いやってた。

しかし、これは危ないと、やむなく靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、ズボンも脱いで、まさに猿股一丁で池の中の重たい石を必死でもち上げた。誰にも見せられぬ姿で奮闘した結果、

二羽のヒナが孵った。しかし、いつの間にか、一羽が消え、残った一羽も消えた。野良猫かトンビにやられたのだろう。自然の掟は厳しい。家の中で、母親に見守られ、泣ける子は幸福だ。そう思うと、「赤子よもっと大きな声で泣け」と言いたくなる。蚊の鳴くような声でなく、腹から声を出してもっと大きな声で泣け

▼昨年、もらって来た合鴨が池の中を歩いていると、小屋を作り、わらを敷いたらやつと巣をつくり、卵を産んで温め始めた。ある朝、議会へ行く

きた合鴨が池の中を歩いていると、小屋を作り、わらを敷いたらやつと巣をつくり、卵を産んで温め始めた。ある朝、議会へ行く

ここは、防空壕の中じゃない、敵兵に気づかれぬよう息を止められる心配はない。ここは原野ではない、トンビやタカに連れ去られることはない。野良猫も野良猫も食べには来ない。

だから安心して泣け
もっと大きな声で泣け
もっと大きな声で泣け
もっと大きな声で泣け
五濁悪世の闇を打ち破り
私は堂々と生きていくと

▼年末、事務所のテレビの電波がとぎれるというので、ケーブルテレビにしたなら、サービスマン期間でいろんなチャンネルが見られた。
私は、全くと言っていいほどテレビは見ないのだが、この時ばかりは東映任侠、時代劇チャンネルの虜になった。
高倉健、菅原文太の追悼番組や年末ということもあって、忠臣蔵のオンパレード。
片岡知恵蔵、長谷川一夫、萬屋錦之介、三船敏郎の演ずる大石内蔵助。

そんな映画を見た後に、家で年越しソバを食べながら、始まった紅白歌合戦を見たら、何だか異様な猿の惑星にでも来た

様な思いに駆られた。
女房の車のカーナビに映ったバラエティ番組などは、神経を逆なでする虐待攻撃のよう、10秒もつけていられたらなかつた。

時代劇で、かつての日本の白砂青松が映ると、あまりの美しさに魅了される。
男の眼力、女が美しい。
時代劇を見ていると、失われた「日本の美」を痛感する。敵方に呼び出され、それが陰謀である事を知りつつ、するが女を振り切り、さらしにドス一本、単身で敵地に乗り込んでいく男伊達。
「お若けえの お待ちなせえやし」、侠客の元祖と言われる幡随院長兵衛、かつて、日本には「弱きを助け強きを挫く」任侠道があった。
「強きを助け弱きを挫く」政治は許せねえ。
それにしても、人を諭すような鶴田浩二の渋いセリフを聞いてから、どうも人前で挨拶するのが億劫になった。

▼年明けの箱根駅伝、往路・復路という言葉聞いて、復路の人生というものを思った。
男は黙って……。

花にある 水のあかるさ水にある 花のあかるさともにゆらぎて (佐藤佐太郎)
本年もよろしくお願い申し上げます。